

目次

●夏の花	はな	原民喜	5
●原爆詩集	げんばくししゅう	峠三吉	41
序／八月六日／死／仮埋葬所にて／ととつたお母さん／	じよ　はちがつむいか　し　かりはうたいじよ		
ちいさい子／呼びかけ／希い——「原爆の図」によせて——	ちいさいこ　よびかけ　ねが　げんばくず		
●石臼の歌	いしうす　うた	壺井栄	79
●つるのとぶ日	つるの　ひ	大野允子	97
●鼓笛隊の襲来	こできたい　しゅうらい	三崎亜記	111
●乾いた風	かわ　かぜ	佐多稲子	141
●おはじき		宮川ひろ	171

私は街に出て花を買おうと、妻の墓を訪れようと思った。ポケットには仏壇からとり出した線香が一束あった。八月十五日は妻にとつて初盆にあたるのだが、それまでこのふるさとの街が無事かどうかは疑わしかった。恰度、休電日ではあったが、朝から花をもって街を歩いている男は、私のほかに見あたらなかった。その花は何という名称なのか知らないが、黄色の小弁の可憐な野趣を帯び、いかにも夏の花らしかった。炎天に曝されている墓石に水を打ち、その花を二つに分けて左右の花たてに差すと、墓のおもてが何となく清々しくなったようで、私はしばらく花と石に視入った。この墓の下には妻ばかりか、父母の骨も納っているのだった。持って来た線香にマッチをつけ、黙礼を済ますと私はか

初盆 その人が亡くなって最初に迎える盆。新盆。
休電日 電力不足のため、会社や工場、一般家庭などへの電力供給を休止する日。
野趣 自然のままの素朴なおもむき。

たわらの井戸で水を呑んだ。それから、饒津公園の方を廻って家に戻ったのであるが、その日も、その翌日も、私のポケットは線香の匂いがしみこんでいた。原子爆弾に襲われたのは、その翌々日のことであった。

私は厠にいたため一命を拾った。八月六日の朝、私は八時頃床を離れた。前の晩二回も空襲警報が出、何事もなかったので、夜明前には服を全部脱いで、久し振りに寝間着に着替えて睡った。それで、起き出した時もパンツ一つであった。妹はこの姿をみると、朝寝したことをぶつぶつ難じていたが、私は黙って便所へ這入った。

それから何秒後のことかはつきりしないが、突然、私の頭上に一撃が加えられ、眼の前に暗闇がすべり墜ちた。私は思わず、わあ、と喚き、頭に手をやって立上った。嵐のようなものの墜落する音のほかは真暗で

饒津公園 現在の広島市東区にある
饒津神社の境内やその周辺の区域。
厠 便所。

——一九四五年八月六日、広島に、九日、長崎に投下された原子爆弾
 によって命を奪われた人、また現在にいたるまで死の恐怖と苦痛にさ
 いなまれつつある人、そして生きている限り憂悶と悲しみを消すよし
 もない人、さらに全世界の原子爆弾を憎悪する人々に捧ぐ。

序

ちちをかえせ ははをかえせ
 としよりをかえせ
 こどもをかえせ

わたしをかえせ わたしにつながる

にんげんをかえせ

にんげんの にんげんのよのあるかぎり
 くずれぬへいわを

へいわをかえせ

八月六日

あの閃光が忘れえようか
 瞬時に街頭の三万は消え
 押しつぶされた暗闇の底で

憂悶 思い悩み、苦しむこと。